

## W-2-4 容認性判断を用いた言語研究の有用性と公正性

太田陽

山泉（2019）は、言語学者自身の容認性判断（言語についての直観）を用いた理論言語学の研究の多くは、「HARKing（Hypothesizing After Results are Known）」と呼ばれるある種の研究不正（Kerr, 1998; Rubin, 2017）とみなせるのではないか、という懸念を表明している。山泉の示唆によれば、容認性判断を用いた研究は、科学的実験とみなすことができる。この実験を通じて理論言語学者が実際におこなっているのは、仮説（理論）を構築することである。つまり、実験を開始する時点では、仮説は立てられていない。しかし、理論言語学の論文では、実験に先立って作られた仮説を検証したかのような報告がなされることが多い。この意味で、理論言語学の多くの研究では、実験結果が分かった後に検証すべき仮説を立てる HARKing がおこなわれているとみなせる（山泉, 2019）。本発表では、言語学における容認性判断を用いた研究を HARKing とみなすことができるのか、検討する。

そのための準備として、まず、言語学内部で続けられてきた、容認性判断の有用性をめぐる論争を振り返る（Chomsky, 1969; Cowart, 1997; Gibson & Fedorenko, 2013; Schütze & Sprouse, 2013 など）。その中で、言語学における容認性判断の使用は、いくつかのタイプの実践に分類できることを明らかにする。分類の基準となる次元の1つは、容認性判断の収集方法である。つまり、容認性判断を用いた言語学の研究は、内観を通して言語学者自身の容認性判断を収集する実践（非形式的方法）と、統制された実験によって非言語学者をふくむ一般の母語話者の容認性判断を収集する実践（形式的方法）とに分類できる。また別の次元は、容認性判断の用途である。つまり、理論の構築のための実践、あるいは、理論の検証のための実践、という分類である。

このような分類を踏まえて、言語学における容認性判断の使用実践を、他分野の研究実践と比較する。まず、言語学と同様に、理論に対する直観の役割と実験的方法の有効性をめぐって論争が続いている、哲学の研究実践を検討し（鈴木, 2020; Schindler & Bröcker, 2020）、容認性判断の有用性を評価する。次に、現に HARKing が「疑わしい研究実践（QRP; Questionable Research Practice）」の1つとして問題視されている、心理学における実験の例を検討し、容認性判断の公正性を評価する。また、それぞれの評価に際して、科学において一般に「実験」と呼ばれる実践を分類しようとする科学史・科学哲学の試みを参照し、理論駆動型実験と探索型実験という区別を導入する（Steinle, 1997; Waters, 2007）。

本発表の結論はおおむね次の通りである。まず、容認性判断の有用性に関して、理論の構築という目的にとっては、形式的方法のみならず、非形式的方法も十分な貢献が可能である。他方で、理論の検証という目的にとっては、非形式的方法は原理的に方法論的問題を含むため、形式的方法に優位性がある。さらに、容認性判断の公正性に関する結論として、理論の構築・理論の検証どちらを目的とするにしても、非形式的方法・形式的方法どちらの実践もそれ自体として HARKing とみなすことはできない。しかし、実際には理論の構築を目指しておこなった研究を、理論の検証として偽装することは、端的に不誠実であり、自身の研究の目的を意識した容認性判断の使用が求められるだろう。

## 参考文献

- Chomsky, N. A. (1969). *Linguistics and Philosophy*. In S. Hook (Ed.), *Language and Philosophy*. New York University Press.
- Cowart, W. (1997). *Experimental Syntax: Applying Objective Methods to Sentence Judgments*. Sage.
- Gibson, E., & Fedorenko, E. (2013). The Need for Quantitative Methods in Syntax and Semantics Research. *Language and Cognitive Processes*, 28(1–2), 88–124.
- Kerr, N. L. (1998). HARKing: Hypothesizing After the Results are Known. *Personality and Social Psychology Review*, 2(3), 196–217.
- Rubin, M. (2017). When Does HARKing Hurt? Identifying When Different Types of Undisclosed Post Hoc Hypothesizing Harm Scientific Progress. *Review of General Psychology*, 21(4), 308–320.
- Schindler, S., & Brøcker, K. K. (2019). Experiments in Syntax and Philosophy: The Method of Choice? *PsyArXiv*, (1996), 1–25. <http://doi.org/10.31234/osf.io/75aru>
- Schindler, S., Drożdżowicz, A., & Brøcker, K. (2020). *Linguistic Intuitions: Evidence and Method*. Oxford University Press.
- Scholz, B. C., Pelletier, F. J., & Pullum, G. K. (2015). Philosophy of Linguistics. Retrieved October 16, 2020, from <https://plato.stanford.edu/entries/linguistics/>
- Schütze, C. T., & Sprouse, J. (2013). Judgment Data. In *Research Methods in Linguistics* (pp. 27–50). Cambridge University Press.
- Steinle, F. (1997). Entering New Fields: Exploratory Uses of Experimentation. *Philosophy of Science Biennial Meetings of the Philosophy of Science Association. Part II: Symposia Papers*, 64, 65–74.
- Waters, C. K. (2007). The Nature and Context of Exploratory Experimentation: An Introduction to Three Case Studies of Exploratory Research. *History and Philosophy of the Life Sciences*, 29(3), 275–284.
- 鈴木貴之. (2020). 実験哲学入門. 勁草書房.
- 山泉実. (2019). 言語学の理論的研究を阻害する諸バイアス. *日本語・日本文化研究*, 29, 44–72.